

【天気予報】

天気は数日の周期で変わりますが、平年に比べ晴れの日が少ないでしょう。気温は高い確率50%です。降水量は、平年並または多い確率ともに40%です。

	平均気温 (°C)	最高気温 (°C)	最低気温 (°C)	降水量 (mm)
2016年	15.6	20.8	11.0	99.5
2017年	15.2	20.3	10.3	82.0
2018年	15.9	21.5	10.9	92.0
1981~2010年	14.3	19.0	9.8	88.8

※気温については、1ヶ月の平均値

【作物】

1 麦

(1) カラスノエンドウの対策

カラスノエンドウの除草は、除草剤だけでは完全な抑草が困難です。圃場の畦畔や周辺部を良く見回り、必ず収穫前に圃場外へ取り除いて下さい。

(2) 赤かび病の防除

赤かび病は開花を始めた時期から開花期（1穂につき数花開花しているものが、全穂数の40~50%に達した日）が主な感染時期です。この時期に温暖（気温15°C以上）で連続降雨があると発生が多くなります。このため、防除適期であるこの時期には必ず防除を実施して下さい。

また、1回目の防除後も温暖多雨で多発が予想される場合には、7~10日後に2回目の防除が必要です。薬剤は1回目は小麦・裸麦ともトップジンM水和剤1,000~1,500倍、2回目は小麦はトップジンM水和剤、裸麦はトリフミン水和剤1,000~2,000倍を散布して下さい。

2 水稻（早期栽培）

(1) 育苗管理

育苗期間中の温度管理には十分注意し、特に低温や高温等の温度変化により、ムレ苗現象や苗立枯病が発生し易くなりますので、適正な温度管理に努めて下さい（ラブリット等による保温）。

なお、苗立枯病にはタチガレン液剤（500倍、500ml/箱）などで防除して下さい。

(2) 本田準備と初期管理

ア 土づくりは、土壌改良剤の鉄強化美土里を60kg/10a施用して下さい。

イ 基肥は、化成444 20kg/10a均一に施用し、野菜跡は基肥を減量して下さい。

ウ 病害虫防除は、フルターボ箱粒剤50g/1箱（移植3日前~移植当日）を施用して田植えを行って下さい。

【注】箱施用剤は施用時、必ずラベルを確認して使用して下さい。

エ 田植後に降霜の危険性がある場合や、やまじ風が吹く場合は、夜間の湛水深をさらに深くして下さい。

<松本>

【野菜】

1 さといも

(1) 種芋消毒及び定植

近年、種芋に起因する病害が多く見られます。安定・高品質生産のために、種芋選別を徹底し、健全な種芋を確保するとともに、必ず種芋消毒を実施して下さい。

また、定植は、天候や土壌水分に留意し、適期作業を心がけて下さい。

病害名	薬剤名	使用方法及び注意事項
黒斑病	ベンレートT水和剤20	種芋浸漬 20倍 1分間 または 種芋粉衣 種芋重量の0.4~0.5%

(2) 親芋等残さ処理

圃場等に放置されている親芋等残さは、疫病対策のために速やかにロータリーで粉砕して下さい。

2 たまねぎ

4月に入り温度の上昇とともに、べと病や白色疫病、ネギアザミウマ等が発生しやすいので、定期防除に努めて下さい。

病害虫名	薬剤名	濃度(倍)	使用時期(使用回数)
べと病、白色疫病	リドミルゴールドMZ	1,000	収穫7日前まで (3回以内)
軟腐病	アタッキン水和剤 スターナ水和剤	800 1,000	収穫7日前まで (5回以内) 収穫7日前まで (5回以内)
灰色腐敗病	セリアーフロアブル20	1,500	収穫前日まで (3回以内)
ネギアザミウマ	モスピラン顆粒水溶剤	2,000	収穫7日前まで (3回以内)

3 そらまめ

(1) 灌水

急激に莢が肥大する時期です。莢の充実を図るため、乾燥が続く場合、畝間灌水を実施して下さい。

(2) 病害虫防除

病害虫名	薬剤名	濃度(倍)	使用時期(使用回数)
赤色斑点病	ロブラール水和剤	1,000	収穫前日まで (3回以内)
さび病	ジマンダイセン水和剤	400~600	収穫30日前まで (3回以内)
アブラムシ類	モスピラン顆粒水溶剤 スミチオン乳剤	4,000 1,000~2,000	収穫7日前まで (3回以内) 収穫3日前まで (3回以内)

※株全体が萎縮やモザイク症状の株は抜き取り圃場外に持ち出して下さい。

<山口>

【果樹】

1 温州みかん

着花（蕾）量と新梢の発生量を確認したら、樹の状況に応じた対応を実施して本年産の着果促進と連年安定生産に努めて下さい。

(1) 着花量が少なく、新梢が多い樹

長く強い新梢の芽かきを行い、花と芽の養分競合を防ぎ着果を促進します。また、立ち枝やかぶさり枝を基部から間引いて、花周辺の受光環境を改善します。

(2) 着花量が多く、新梢が少ない樹

着花数を減らし、新梢の発生を促します。特に着花過多の樹では、樹冠上部や新梢の発生が望める樹冠外周で積極的に予備枝の再設定を行い、新梢を早く発生させることで、今年の樹勢維持と次年産用の結果母枝の確保に努めて下さい。

2 中晩柑類

着花（果）過多の状態に陥ると、樹勢が低下します。特に隔年結果性が強い甘平では、前年産の着果量が極端に少なかった樹は、着花過多による樹勢の低下が心配されます。着花量が著しく多い樹では、団子花（直花）のせん除と併せて早めに予備枝を再設定し、残した有葉花の充実と新梢発生による樹勢維持に努めます。

3 液肥の葉面散布と灌水

新梢、新葉の緑化促進と着花過多樹の養分の消耗を補うため、窒素主体の液肥葉面散布を10~15日間隔で2~3回実施して下さい。

新梢と花の発生・充実には適度の土壌水分が必要です。土壌の乾燥が続く場合は、適宜、灌水を行います。

4 病害虫防除

甘平等かいよう病の発生が多かった園では、開花前（4月下旬頃~5月上旬）にも銅剤の散布を行います。葉害発生には十分に注意し、ICボルドー66D、80倍（パラフィン系展着剤加用）などを散布して下さい。

<可部>

【花き・花木】

1 シキミ

4月は発芽期になります。柔らかい新芽に害虫が発生すると生育・品質が低下します。発生初期にしっかりと防除し、盆の需要期に良品生産ができるように努めましょう。モスピラン水溶剤2,000倍、カルホス乳剤1,000倍、トップジンM水和剤1,000倍を混用散布して下さい。

2 アネモネ・ラナンキュラス

菌核病では、植物の地際部が白色綿毛状の菌糸で覆われ腐敗します。気温15~20°C・多湿条件で発病します。トップジンM水和剤1,500倍を予防散布して下さい。

暖かくなるにつれ、花が咲き始めます。球根を肥大させるため早めに摘花して下さい。摘花した花がらや、菌核病や腐敗病などの病害発生株を早めに抜き取り圃場外へ出し、病害の拡大を防ぎましょう。

<日野>

【畜産】

(ハエの計画的防除)

ハエがいつごろ発生し増えているのか昨年度に畜種別で調査したところ、調査開始の3月中旬にはすでに少数ながらヒメイエバエ成虫が養鶏農場を中心に発生していました。

そして4月に入ると畜種に関係なく小型のショウジョウバエや中型のイエバエ、キンバエ、大型のクロバエ等が発生を始めます。

ハエ防除対策のポイントは、発生の初期段階で堆肥中の幼虫のときにいかに個体数を減らすかにあります。そのためには、定期的に以下の対策を行います。

○堆肥の切り返しは1週間おきに行う

切り返し作業により表層部で60°C以上の高温発酵が進み幼虫が死滅します。あまり切り返しを行うと逆に発酵（温度上昇）が妨げられるため、1週間の切り返し間隔が適当です。

○動物糞（脱皮阻害剤）による幼虫防除を約2週間おきに行う

ハエ成虫は堆肥の表面に産卵し、孵化した幼虫（ウジムシ）は2回脱皮してサナギを経て成虫になります。春はまだ気温が低く幼虫の期間が10日程度（夏季は5日程）かかるため、約2週間おきに堆肥の表面に脱皮阻害剤（ネポレックス、シロマジン、バイバック等）を散布します。

○ハエ取りペットボトル等による成虫の捕殺

補助的手段として、誘引剤入りハエ取りペットボトルの中に入れて誘引剤の効果により成虫を捕殺します。

<二神>